

TESL とフェミニズムの交差点

ーフェミニズムの教室をつくるー

吉原令子

なぜ、英語を学ぶのか？

「やっぱりTOEICは受けたほうがいいですよ」「TOEICで何点ぐらいとったらいいんですか？」と、最近、大学生からよく質問される。ここ数年にわたる、大学生から中高年のサラリーマンにいたるTOEIC学習ブームは異常としか思えない。そもそも「なぜ、英語を勉強するのか？」「英語を身につけて何をしたいのか？」という学習目的が問われないまま、「就職にいいから」あるいは「査定や昇進にTOEICを導入する企業が増加しているから」という理由で、英語を勉強する。そして、私たち教員側も、効率、管理、アカウンタビリティを中心とした市場原理が教育という現場に強調される結果、教員の資質向上や生徒のテストスコア上昇が至上命令とされている。このような傾向は、明らかに日本の大学や企業におけるTOEIC学習ブームを引き起こしている。

しかし、英語とは本来「コミュニケーションの道具」でしかないはずである。英語を道具として使い、教える私たちに求められているのは、TOEICのスコアを上げることや資格試験に合格させることではないだろう。私たちに本当に求められているものは、「変革」である。教室は、それぞれの時代の社会問題や課題に取り組むことによって、そして、自分とは違う習慣・知・文化が創り出す「差異」、すなわち白人でないこと、男性でないこと、労働者階級でないこと、ヨーロッパ文化を学習しなかったことなどという「他者性」が提起する新たな境界枠と出会うことによって、自分が置かれた「場」の中での人間関係・利害・権力の不均衡な配分に対して「批判的意識」をもち、自己変革や状況変革への行動を起こすための空間となるべきではないだろうか。少なくとも、私はそうあるべきだと信じている。

変革をもたらす批判的教授学の系譜は新しく、1960年代にブラジルに

において抑圧された貧しい人々の自立／解放を目指す成人教育の実践した、パウロ・フレイレの「解放の教授学」あるいは「希望の教授学」と呼ばれる教授学理論と実践に端を発する。そして、フレイレの教育実践に触発されて、多文化社会アメリカにおける新たな変革的教育理論を開拓しようとしたのがヘンリー・ジルである。フレイレの実践がブラジルの農村地域を中心に行われたものであるのに対して、ジルは多文化・多人種社会アメリカが直面する課題状況に対処するためにふさわしい独自の教育理論や実践を展開しようとしている。フレイレの教育実践に触発されたのはジルだけではない。ブラック・フェミニストのベル・フックスもその一人である。フックスは、フレイレと「行動する仏教」の提唱者であるティク・ナット・ハンから強い影響を受け、彼女独特のフェミニスト的視点や実践を統合することによって、現代アメリカ教育や文化にみられる諸問題を批判・解釈・変容しようとする。彼女の特徴は、自らが語るように、反植民地的な教授学と批判的教授学とフェミニスト教授学を統合させたところにあり、「自由のための実践」としての「関係性の教育学」を展開したところにある。

フックスが唱える「関係性の教授学」を視野に入れて、「なぜ、英語を学ぶのか」という質問をもう一度考えてみたい。フェミニストとして、英語教員として、教育者として、私は「権力に抵抗するために、そして、シスターフッドや連帯（alliance）を築くために、英語を学ぶのだ」と答える。この論文では、「なぜ、英語を学ぶのか」という疑問から端を発し、英語の中に潜む権力関係やエンパワーメントを分析し、私自身、生徒としてファシリティタとして参加している女性のための英語講座「Colors of English」で行われたフェミニスト教授法を紹介したい。ここで紹介されるフェミニスト教授法が、1クラス50人もいる大学の教育現場で同じように実践できるとは私も思っていない。しかし、少しでも、そのヒントになればと願っている。そして、この論文が、変革が求められている教育現場において、現在、成果や結果が重視され、教えることを過小評価するような傾向に一石を投じるものとなることを願っている。

権力とエンパワーメント

「グローバリゼーション」という用語が諸分野において頻繁に用いられている。英語はそのグローバリゼーションとは切っても切れない関係に

ある。「グローバルスタンダード」と言えば聞こえはいいが、とどのつまり「アメリカン・スタンダード」であることは誰の目にも明らかである。その「アメリカン・スタンダード」を享受できる人間は、中流階級の白人男性、異性愛、プロテスタントである。彼らが使う言葉こそ、オードリ・ロードが「マスタース・ツール」と例える「標準英語」である。「標準英語」を話す人たちのところに権力が集中し、その人たちが強い発言権をもつ。そして、第二言語として英語を教える時、その「標準英語」が「正しい英語」であるという考えが暗黙の了解として存在していないだろうか。アメリカの中流階級の白人が英語が「正しい英語」で、アフリカ系アメリカ人やアメリカ先住民やヒスパニックやアジア人が話す英語は「訛りのある汚い英語」「正しくない英語」という二項対立的構図をつくりだし、そこに上下関係を導入し、「欧米が優れていて、非欧米は劣っている」という価値観を生み出している。

フックスは、英語が言語以上のものであることを教えてくれる。

標準英語は流浪の民の言語ではない。それは征服と支配の言葉なのだ。アメリカ合衆国において標準英語とは、数限りない言葉、そうした言葉の織りなすさまざまな響き、もう決して耳にすることのない先住民の話し言葉、ガラやイッディッシュの話し言葉、そしてその他の多くの忘れ去られた話し言葉の喪失を覆い隠す仮面なのだ。¹

英語は「征服と支配の言葉」であるというフックスの言葉を深く受けとめることで、私は英語という言語そのものではなく、「標準英語」を使う言語行為によって弱者は抑圧されているのだということがわかるようになった。英語は征服するための武器であり、英語が話せない人々を恥じ入らせ、さげすむ効果を発揮する。

だからといって、私は、英語を勉強するなど言いたいのではない。それどころか、こういった権力に抵抗するために英語を学んでもらいたいと思っている。「標準英語」を話す人たちだけが「正しい」と思わせる英語文化帝国主欽に挑むために、当たり前と思われている慣習や文化を暴き抵抗するために、英語は抵抗の言語となりえるし、まだまだ有効な道具である。そして、アドリエンヌ・リッチが詩の一節で「支配者の言葉であっても、あなたに語りかけるためにわたしにはこれが必要」²と語るよ

うに、女性同士の連帯や政治的連帯を築くために英語は必要な言語なのだ。道具として英語を使うことによって、地球上の女たちは自分たちの体験を語り合い、共有し、お互いにエンパワーメントを与え合える可能性をもっている。私は、そんな可能性を、たとえ英語が支配者の言葉であっても潰したくない。

女性のための英語講座「Colors of English」の多様性

1996年秋に朴和美さんの発案で、成人教育として、女性のための英語講座「Colors of English」が始まった。私は開講以来、生徒として、ファシリティタとして、そして、『やさしい英語でフェミニズム』の監修者として、講座に参加してきた。そこで得たフェミニスト教授法を紹介したい。その前に、この講座の目的とクラスルームの多様性（diversity）について少し触れておきたい。

講座名「Colors of English」を訳すならば、「色とりどりのさまざまな英語」になるかもしれないが、たぶんそれでは本当に意味するところが伝わらないと思う。フェミニズム用語の中に「women of color」という言葉がある。アンジェラ・デービスは、women of colorを生物学上の概念でも人種的アイデンティティでもなく、ある政治的課題を共有する女たちのコミュニティを指すポリティカル・アイデンティティであるとし、「有色人種の女性（colored women）」とは区別している。³「Colors of English」にも二つの政治的理念がある。ひとつは、英語はひとつではないということである。中流階級のアングロサクソン系白人が話す英語が「正統な英語」で、非白人が話す英語は「正統ではない英語」という考えには陥りたくないということである。したがって、「Colors of English」では、ゲストスピーカーとして、アメリカ人（アングロサクソン系、アフリカ系、日系、韓国系）、イギリス人、カナダ人、イラン人、フィリピン人、ドミニカ人女性たちをゲストスピーカーとして招待してきた。人種／民族や国籍だけではなく、階級も性的指向もできるだけ広範囲に渡る女性たちを招いてきた。もうひとつは、デービスが語るところの「ポリティカル・アイデンティティ」を共有できる場所を築きたいということである。ジェンダー、セクシュアリティ、人種／民族、階級などが複雑に入り組んだ社会問題に自覚的になり、そして、参加した女性たちの経験を大事にしつつ英語を学べる場所をつくりたいと願っているし、現在進行形の

行為である。

ファシリティタだけではなく、「Colors of English」の生徒もまた多様性に富んでいる。今まで参加した生徒は、在日コリアン女性や日本人女性やイラン女性という民族的な違いだけではなく、性的指向も階級も学歴（高卒、大卒、大学院卒）も年齢もさまざまである。語学レベルも、留学経験者を含む上級レベルから初級レベルまでさまざまである。しかし、英語ができる／できないで、自他を差別化／序列化する意識をつくらず、女性を取り巻く社会問題を英語で語れるようになりたいという信念のもとで女性たちが集まったことは、序列をつくらない／女が分断されないコミュニティを体現化できたことを意味している。

これから紹介する教授法が大学の英語教育のクラスルームにすべて導入できるとは私も思っていない。クラスの大きさも、ファシリティタや生徒の多様性も、生徒のモチベーションも、生徒の語学力も、すべてが大学の英語教育の教室とは違うのだから…。しかし、いくつかヒントになる、あるいは、取り入れることが可能な教授法があるのではないだろうか。その一助になればと願っている。

〈ケース1〉安全な場所をつくる

女性問題を語るということは、「私」の「女」として経験を語ることもある。だからこそ、安全な場所づくりはフェミニスト・ファシリティタにとっては絶対に無視することができない。いったい、どうしたら私たちはフェミニズムを語るための安全な場所をつくることができるのだろうか。ひとつは力を分かち合うこと、そしてもうひとつは沈黙を理解することである。

私たちの社会が決して平等主義でないように、教室の中もまた平等ではない。私たちフェミニスト・ファシリティタは、誰が社会で力をもっているのかということに敏感であるように、教室の中でもそのことに敏感であるべきだ。教室の中で、いったい誰が力と権力をもっているのか？ それは、教師であり、日本人の中流階級出身の異性愛の男性（マジョリティの生徒）である。力がない者は、生徒であり、ジェンダー、性的指向、民族、人種、階級、年齢、身体的障害などを基盤としたマイノリティの生徒である。

英語講座「Colors of English」では、「教師」対「生徒」という力関係を

崩すために、教師を「先生 (teacher)」と呼ぶのをやめ、「ファシリティタ (facilitator)」と呼ぶことにした。そして、伝統的な教室を壊すために、みんなが円を描くように座ることにした。このようなことは表面的なことではあるが、伝統的な教室 (先生は教壇に立ち、生徒はその前に列になって座るといふ形) でしか教育を受けてこなかった女性たちにとって、ファシリティタと生徒が一緒に円になってすわるという経験は、平等という意識を高めることにつながると思われる。また、「Colors of English」に参加してくれたファシリティタは、フェミニスト教育者としての己を十分に理解している人が多かったので、自らが率先してリスクを負ってくれたことが安全なスペースづくりに役立った。ファシリティタたちは自らの性的指向、民族／人種、階級などの出自や経験を語ることによって、生徒にだけにリスクを負わせるようなことはしなかった。そのため、セッションごとの最初の講座は自己紹介に十分な時間をとるようにした。また、ファシリティタの中には、柔らかい色とりどりのビニールのボールを教室にもってきて、クラスメートの名前をお互いに呼び合いながらキャッチボールをすることによって、その場を和ませくれた人もいた。また、チョコレートの M&M を配って、取ったチョコレートの個数分だけ自分のことを話すという試みもあった。どの方法も、「教師」と「生徒」という上下関係を崩し、力を分かち合うことに役立った。

しかし、一方で、沈黙を守る女性たちも教室には存在する。沈黙するにはそれなりの理由がある。ミニ・オーナーは論文「解放教育において生徒の声を妨げているもの：フェミニストのポスト構造主義的視点」で、以下のように語っている。

生徒たちが語るのには安全ではないと思う時がある。ある生徒のボディ・ランゲージが他の生徒を脅かすとき、そして、教師が援護者とは思えないときである。⁴

ファシリティタはその女性の沈黙を理解し、尊重しなければならない。あるファシリティタは、会話をせずに、沈黙を破る方法があることを教えてくれた。彼女は、大きな模造紙をもってきて、その日のテーマについて自分の思うこと／考えをアトランダムに書かせた。それまで沈黙を守っていた生徒は、好きな色のペンをとり、自分の思いを模造紙に書き

始めた。また、他のファシリティタはジャーナルをつけることをすすめてくれた。書いてきたジャーナルを生徒間で交換し、コメントを書き添えるというものだ。書くという試みを通して私が学んだことは、英語を話すことが他の英語の技能よりも優れているわけではないこと、口に出して語ることだけが沈黙を破ることではないということだった。

〈ケース2〉抵抗の手段を学ぶために／他者を理解するために

TESLの分野では、ロールプレイの効果はすでに実証済みで、多くの教師が英語教育で採用している。ある状況を設定し、想定される会話を繰り返すことによって、自発的に会話／応対ができるようになることがロールプレイの目的である。しかし、英語講座「Colors of English」では、抵抗手段を学ぶための、そして、多様な女性の立場を理解するためのロールプレイを行った。

たとえば、「夫婦別姓は認められるべきか」を議論するとき、グループ1は夫婦別姓反対派を、グループ2は夫婦別姓賛成派を演ずる。このようなロールプレイは、夫婦別姓反対論者にどう抵抗したらいいのかを学ぶことができるばかりではなく、夫婦別姓反対論者の考えや差別構造を分析することができる。ロールプレイの後、一つのグループになってもう一度語り合い、夫婦別姓を望む女性はどうな女性たちなのか、また、日本の税制度や福利厚生などとの関連について分析する。

また、多様な女性の立場を理解するために、4、5グループに分けて、ロールプレイを行うこともできる。たとえば、「ポルノグラフィの是非」について語るとき、グループ1はカトリック教徒のアメリカ人女性を、グループ2はレズビアン女性を、グループ3は日本人女性を、グループ4は元セックスワーカーを、グループ5はタイ人女性をロールプレイとして演じる。このようなロールプレイを演じることによって、私たちは自分とは違う立場の女性の考えを想像し理解することができる。同時に、自分が他者にもつ固定観念にも気づくかもしれない。

〈ケース3〉エンパワーメントを鍛える

自己主張をすることはエンパワーメントになる。エンパワーメントとは、それぞれの女性がもっている「内なる力」を引き出すことである。堀田碧はエッセイ「女と力」で、『内なる力』は、まず何よりも自分の内

から発して自分を支える力、自分のなかから湧き出てくる力だ。それは、結果として、他人に影響を与えたり、他人を動かしたりすることがあるが、もともと『他人のため』ではなく、『自分のため』の力。つきつめて考えると、きっとそれは人間を人間たらしめているもの、生命のエネルギーの輝きのようなものかもしれない⁵と語っている。では、私たちは、TESLという現場で、この「内なる力」をどう鍛えたらいいのだろうか。あるファシリティタは、次の週に、トピックは何でもよいからスピーチをするようにと言った。スピーチの仕方も、欧米のスピーチ形式にはこだわらず、自分の好きな形式で話し、詩や引用文を読んでもよいというものだった。当日、生徒たちが話したトピックは、日本の女性の社会進出、シングルマザー、在日の女性の状況といった女性問題から、好きな女性アーティスト（画家、音楽家、俳優）の紹介とさまざまだった。また、話すのが得意ではないという生徒は詩を読んだり、本の中の一節を読んだりした。スピーチという行為から私たち生徒が学んだことは、「内なる力」を引き出すことであり、他人に影響を与えることだった。そして、聞かれることの喜びであった。今まで、聞かれることのなかった声を発する、あるいは、聞くによって、私たちは私たちのもつ可能性を解き放ち、変わることができる。スピーチはエンパワーメントを引き出す手段のひとつである。

〈ケース4〉自分の中の偏見や差別意識を乗り越えて

レイプ、セクハラ、ドメスティック・バイオレンス、同性愛、更年期などの女性をとりまく性的な問題には、必ず神話が存在する。たとえば、レイプを取り上げれば、「多くのレイプ事件は道ばたで起こり、知らない人によって引き起こされる」や「年取った女性はレイプされない」や「女性の服装や振る舞いが挑発的だとレイプされる」といった神話が存在する。教室で、何が神話で事実かを話し合うことによって、自分の中の偏見に気づくことがある。自分の中に潜む偏見や差別意識に気づくことは決して心地よいことではないが、気づかなければ他者を理解することはできない。

私は大学院の学生だった頃、アメリカで人種差別反対デモに参加したことがあった。参加者のひとりであったある黒人男性は「私たちはみんな人種差別者なのだ。私もだ。でも、そこからスタートしなければなら

ない」とデモ者たちを前に語った。自分の中に潜む偏見や差別意識に気づいていながらも知らぬふりをしてきた私にとって、彼の言葉はショックであった。しかし、自分の偏見や差別意識を認めることは、私に私自身が変わることを教えてくれた。自分自身が変わることで、私たちは自分が属さない被抑圧者グループとも連携することができる。チカナ・フェミニストのグロリア・アンサルドゥーアは「私たちはみんな同じ抑圧をもっているわけではないが、他者の抑圧に共感することができる」⁶と語るように、たとえ抑圧の体験が同一のものでないとしても、政治的課題の分有において他のグループと連携できる可能性があることを教えてくれている。

私は「あなた」のために何ができるのだろうか

「国際会議に行ったけど、世界の女性たちと思うように交流ができなかった」あるいは「この前、会った外国人に、日本にいる女性の状況をもっと説明しかつたのに…」といった「あなた」の悲鳴を何度聞いたことでしょう。私は「あなた」に何ができるのだろうか。

私は偶然にして、アメリカ合衆国に留学できる機会に恵まれた。英語はアメリカ合衆国で生きていくための道具でしかなかったとはいえ英語を習得し、女性学を専攻した。そして、現在、英語を教えるという仕事に就いている。女性学は私に見えないものを見えるようにしてくれた。そして、自分からスタートすることの大切さを教えてくれた。私だけではなく、多くの女性たちの共感をよんだフェミニズムは、新しい局面を迎え、フェミニズムと複数形で語られるほど多様化した。それは、「女」というだけではもう連帯できない困難さを表している。女性間に横たわる差異、たとえば、第一世界対第三世界、キャリアウーマン対専業主婦、英語ができる／できない、などは、女を序列化し、分断してしまっている。しかし、一方で、差異を差異として認め、序列化しない／分断されない関係を求めて、課題によっては自分が属さない被抑圧者グループと連帯する可能性を模索するグローバルな動きがある。

私は、「わたし」（自分が属する被抑圧者グループ）のために、そして、「あなた」（自分が属さない被抑圧者グループ）の援護者（Alley）になるために、抵抗と連帯の手段として英語を学び、教えたい。

註

- 1 bell hooks, *Teaching to Transgress* (New York: Routledge, 1994), p.168.
- 2 Eds. Adrienne Rich and Barbara Charlesworth Gelpi, *Adrienne Rich's Poetry and Prose: Poems Prose Reviews and Criticism* (New York: W.W. Norton & Company, 1993), pp.41-43.
- 3 women of color を「有色女性」と訳してしまうと意味するところが表現されないと思われるので原語まま記すことにする。鄭暎恵は「フェミニズムのなかのレイシズム」で、「アンジェラ・デービスも言っているように、women of color とは生物学上の概念でも人種的アイデンティティでもなく、ある政治的課題を共有する女たちのコミュニティを指すポリティカル・アイデンティティなのである」と述べている。(江原由美子、金井淑子編『フェミニズム』新曜社、1997、p.90-91)
- 4 Mini Orner, "Interrupting the Calls for Student Voice in 'Liberatory' Education: A Feminist Poststructuralist Perspective" in Eds. Carmen Luke and Jennifer Gore, *Feminism and Critical Pedagogy* (New York: Routledge, 1992), p.81.
- 5 堀田碧「女と力」、『くらしと教育をつなぐWe 6月号』(フェミックス、2002) pp.7-8.
- 6 Gloria Anzaldua, "La Prietita," in eds. Cherri Moraga and Gloria Anzaldua, *This Bridge Called My Back: Writings by Radical Women of Color* (New York: Kitchen Table: Women of Colors Press, 1981), p.201.

参考文献

日本語

- 江原由美子、金井淑子編 『フェミニズム』(新曜社、1997)
- 『くらしと教育をつなぐWe 6月号 特集：力の再定義』(フェミックス、2002)
- パウロ・フレイレ 小沢有作他訳『被抑圧者の教育学』(亜紀書房、1978)
- 早川操「越境教授学の挑戦—H・ジルーによる公共知識人教育の教育理論」、『情況 2000年4月号』(情況出版、2000.04.01)

英語

- hooks bell. *Teaching to Transgress*. New York: Routledge, 1994.
- Lorde Audre. *Sister Outsider*. California: The Crossing Press, 1984.
- Eds. Luke, Carmen and Jennifer Gore. *Feminism and Critical Pedagogy*. New York: Routledge, 1992.
- Eds. Moraga, Cherri and Gloria Anzaldua. *This Bridge Called My Back: Writings by Radical Women of Color*. New York: Kitchen Table: Women of Colors Press, 1981.
- Eds. Rich, Adrienne and Barbara Charlesworth Gelpi. *Adrienne Rich's Poetry and Prose: Poems Prose Reviews and Criticism*. New York: W.W. Norton & Company, 1993.

At the Crossroads of Feminism and TESL

— Creating a Feminist Classroom —

Reiko Yoshihara

Translated by Barbara Summerhawk

Why Study English?

“I guess I’d better take TOEIC” and “What kind of score should I get on TOEIC?” are what we hear from university students recently. For several years now, no one thinks it unusual that everyone from university students to older, salaried workers are caught up in this “study for TOEIC” boom. Without much of a purpose for studying English, people are taking it up for such reasons as “It’ll help in the job hunt” or “Companies that use TOEIC scores for hiring and promotion are increasing.” Further, classroom education has been strongly influenced by market principles, especially pertaining to efficiency, management, and accountability. As a result, there is pressure on us who are educators to improve our abilities and increase test scores of our students, and this is behind the TOEIC boom.

In reality, English is just a tool for communication. To use English as a tool, we who teach English are not interested in just raising TOEIC scores or passing examinations. What we are really encouraging is “change.”

As we teach about social problems and issues through various periods in history, customs and knowledge that are different from our own, we come to realize we are not white male, have not been raised in European culture, are not working class, but instead, we are “other,” and through this awareness of our being “other,” the classroom can become a place in which we can change ourselves and our situations as we develop a strong critical consciousness with regard to the imbalance in power and privilege in human relationships.

The genealogy of this critical pedagogy that encourages reform originates

in the theory and practice of Brazilian Paulo Freire's "Pedagogy of Liberation" and "Pedagogy of Hope" developed in the 1960s out of his adult education that pointed toward liberation for the poor and oppressed. Freire's new educational methods set off reform and encouraged a new radical educational theory by Henry Giroux in multicultural America. Whereas Freire's practice was centered in the peasant villages of Brazil, Giroux wanted to create a suitable, original theory and practice for a multiracial American society so it could face its problems. Giroux was not the only person to be influenced by Freire. Black feminist bell hooks was another. Borrowing from Freire and the "Socially Engaged Buddhism" of Thich Nhat Hanh, hooks integrated her unique feminist viewpoint with practice and changed the appearance of the way present-day American education and culture criticize, solve and reform various problems. Her distinctive mark is the integration of anticolonialist pedagogy, critical pedagogy and feminist pedagogy, unfolding a "practice of freedom" and "engaged pedagogy." While chanting the praises of hooks' "engaged pedagogy," I want to reconsider the question, "Why learn English?"

As a feminist, an English teacher and educator, I would answer, "I learn English to resist authority, and to build alliances through sisterhood." In this essay, I would like to introduce a feminist pedagogical method, starting with the question, "Why study English?", analyzing the connections to power and authority that lurk in English, and empowerment, as a student and facilitator of an English class for women, "The Colors of English." I do not think that we can use the same method of this feminist pedagogy in a university class where there are more than 50 students. Nonetheless, I hope through a hint here and there that things can change a little. Finally, perhaps this essay can be like a stone cast into the waters where education reform is being encouraged, with its rippling effects being given careful consideration.

Power and Empowerment

"Globalization" is a frequently heard catchphrase. English is connected to whether you can be a part of this globalization or not. It may be okay to speak or to hear of "global standards," but clearly, to everyone that means an "American standard." The people who can use that standard to perfection tend to be white,

middle-class, heterosexual male Protestants. The words they use are what Audre Lorde compared to the “master’s tools.” Power is concentrated in those people who speak “standard English” with those people having a strong right to speak. And when teaching English as a second language, don’t we have a silent understanding that this “standard English” is actually “correct English”? American white middle-class English is the correct English. That the English of African-Americans, immigrants, Hispanics and Asians is “accented, unclear English,” “incorrect English” becomes a secondary message of our teaching; we learn the value of rank with Europeans and Americans as superior and non-Europeans and non-Americans as inferior.

Standard English is not the speech of exile. It is the language of conquest and domination; in the United States, it is the mask which hides the loss of so many tongues, all those sounds of diverse, native communities we will never hear, the speech of the Gullah, Yiddish, and so many other unremembered tongues.¹

We catch the meaning of hooks’ words that English is “the language of conquest and domination”; it is not just that I have to speak English, we can understand that powerless people are oppressed by having to conform their speech to “standard English.” It is a weapon that English uses for control, shaming people who can’t speak English, demonstrating this degrading effect.

I’m not saying “stop studying English.” Rather, I think I’d like to learn English in order to resist this power. To resist not just the idea imposed by English-language culture imperialism that only people who speak “standard English” speak “correct English,” but also to aggressively oppose the idea that we are supposed to accept its customs and culture as normal. English can be an effective tool of resistance. As Adrienne Rich says in one of her poems, “Even though it is the master’s language, I need this in order to speak to you,²” women need English to build political and personal solidarity among women. Using English as a tool, it is possible for the women of this world to share their experiences, find their commonality, and mutually empower each other. I don’t want to crush that kind of opportunity.

The Diversity of “Colors of English” Class for Women

The “Colors of English” class got its start in 1996 by Hwami Park. I’ve participated in this class as a student, as a supervisor for “Feminism in Easy English,” and as a facilitator. From this experience, I’d like to introduce feminist pedagogy, but before that I’d like to talk a little about the purpose of this class and the diversity in its classroom.

If we translate “Colors of English,” it may become the various tints and hues of English, but it probably doesn’t stop there. Within the discourse of feminism is the term “women of color.” Angela Davis distinguishes between “women of color,” which defines more simply biology, or a racial identity, but unites women who share common political agendas as a political identity; and “colored women,” who are women of a race or color.³ “Colors of English” also has two political agendas. One is that there is no one kind of English. We don’t want to fall into thinking that the English of white middle-class Anglo-Saxons is the “legitimate English” and that nonwhite people’s English is “illegitimate.” Consequently, “Colors of English” has entertained guest speakers, women from America (Anglo-Saxon, African-, Chinese-, Korean-, Japanese-), English, Canadian, Iranian, Filipino, and Dominican women as well. We’ve asked women who cannot only teach something on race, ethnicity and nationality, but also have a wider understanding of class and gender issues. One more ideal we have is to provide a space for women to share what Davis calls “political identity.” We want to create a place where women can integrate their personal experience, subjectively connecting it with the complexity of social problems such as race, class and ethnicity.

Not just the facilitators reflect the diversity of “Colors of English,” the students do also. Among the students who have participated so far, there have been not just ethnic diversity such as Japanese-born Koreans, Japanese and Iranians, there has been a great deal of diversity in sexuality, class, educational levels (high school, university, graduate school) and age. There are also various linguistic levels represented, from highly competent women who have studied overseas to beginners. We do not, however, divide ourselves by those who can and cannot speak English; we have gathered women who believe that we should not discriminate or create hierarchies but be able to discuss social problems

surrounded by women; we personify a community in which we do not divide or rank women.

The next few pedagogical methods I want to introduce are not really applicable to university English education, partially because the class size, the diversity of facilitators and students, student motivation, and student linguistic ability are all different from university class situations. Nevertheless, through several hints I'd like to suggest possible methods that may be applicable. I hope they will be of help.

Case 1: Making a safe place.

In our discussion of women's problems we talk about our personal experiences as "woman." Thus we absolutely cannot ignore the importance of a feminist facilitator in the creation of a safe space. How can we create a safe space in which we can discuss feminism? One way is sharing power and another is understanding silence.

Just as there is not equality in society, there is not equality in the classroom. We feminist facilitators must be aware of who has power in society and we must be sensitive to this in the classroom. In the ordinary classroom, who has power and authority? They are the teachers and heterosexual Japanese men from middle-class backgrounds (the majority of students). People without power are students, and students who differ from the mainstream and are minorities in terms of sexual orientation, gender, ethnicity, race, class, age, and physical ability.

In order to break down the teacher vs. student relationship, the "Colors of English" class stopped referring to the teacher as Sensei and instead called her "facilitator." And to break up the traditional classroom, everyone sits in a circle. These are all superficial changes, but it is thought that the experience of the facilitator and students sitting together in a circle helps raise consciousness about equality for women who have only received an education in the traditional classroom (the teacher stands at the podium and the students sit in rows in front of him or her). Again, the facilitators who have participated in "Colors of English" have been people who understand themselves as feminist educators, so they have been successful in taking the initiative and reducing risk in creating a safe space. Since facilitators tell of their own experiences in terms of sexual orientation,

ethnicity/race, class, students feel as less threatened in taking a risk. To help this process, each session begins with adequate time for self-introductions. There was even one facilitator who brought varied-colored plastic balls to class and each person tossed a ball to a classmate while calling her name to make for a relaxed atmosphere. Then there was the time we tried having M&M chocolates and however many you drew, you had to speak for that many minutes about yourself. Whatever method, we were successful in challenging the top-down relationship between “teacher” and “student.”

At the same time, however, there are women who want to protect their silence in the classroom. Mini Orner, in her essay “Interrupting the Calls for Student Voice in ‘Liberatory’ Education: A Feminist Poststructuralist Perspective,” has this to say:

There are times when it is not safe for students to speak: when one student’s socially constructed body language threatens another; when the teacher is not perceived as an ally.⁴

The facilitator should understand and respect a woman’s silence. There was a facilitator who taught us that it is not just in speech that a woman’s silence can be violated. She brought big sheets of butcher paper to class and called on students at random to write a theme for the day’s discussion. Students who until then had understood they could remain silent took colored felt-tip pens and began to write on the paper. Another facilitator encouraged students to keep journals. What students wrote in their journals was then to be shared with the others, and other students could write comments. Through this trial by writing, I learned that speaking ability isn’t necessarily superior to other abilities, and one’s silence can be violated not just through the spoken word.

Case 2: To understand others, to learn of resources for resistance.

Role playing has long been one of the TESL methods used by many teachers. The purpose of one established practice is to assign some hypothetical dialogue and do role-plays to be able to personally deal with the assigned problem. The “Colors of English,” however, does role-plays in order to understand viewpoints of women from diverse backgrounds so that we might learn ways of resisting authority.

For example, when discussing “Should different surnames be allowed for married couples?”, group one opposes the idea while group two supports it. Through this kind of role-play, we learn not only how we can best answer those people opposed to different surnames, but also how to analyze the opposition’s way of thinking and the structure of its discrimination. After the role-play, all of us in one group discuss what kind of women want to use different surnames from their husbands, and analyze the Japanese income tax system and welfare in connection with this.

Another method to build understanding of diverse backgrounds of women is to break into four or five groups. Then, for example, when discussing “Pornography, right or wrong?” one group takes an American Catholic woman’s point of view, group two a lesbian’s, group three a Japanese heterosexual woman’s, group four a former sex-worker’s, group five a Thai woman’s, and then we do a role play. Doing this kind of role-play allows us to imagine as well as understand the standpoints of women different than ourselves. We also may learn the way we stereotype others.

Case 3: To forge empowerment.

Being able to assert ourselves empowers us. Empowerment is being able to draw on an “inner strength” that many women have. Midori Hotta, in her essay “Women and Power,” defines inner strength as being the strength to sustain oneself longer than first thought, the strength to draw out courage from within. As a result, while not only just being able to influence and move others, we have the strength “for ourselves.” If we inquire about this further, certainly we may conclude that this selfish strength is part of our humanity, perhaps even the sparkling energy of life itself.⁵

How can we forge this “inner strength” for TESL? One facilitator gave an assignment for the next week to give a speech on any topic. The way of giving the speech need not conform to European and American ways of giving speeches, but we were to speak as we wished, and reading a poem or a quotation was also acceptable. The next week, we heard about many different kinds of topics such as Japanese women going out to work, single mothers, women’s problems as foreign resident women, and favorite artists (painters, musicians, actors). Women

who were not thrilled about giving speeches read poems or paragraphs from books. From giving speeches, we students learned that we had an inner strength to draw on and we could influence others. We were elated to find that we were listened to. We can liberate our potential and change. Public speaking is one way of becoming empowered.

Case 4: To move beyond our own prejudice and discriminatory thinking.

There are certainly many myths about the various problems surrounding women such as rape, sexual harassment, domestic violence, sexuality, and menopause. For example, if we take rape, there are the following myths: “Most rapes occur on the street, and are done by strangers” or “Women ask for rape because of the clothes they wear or the way they walk.” In the classroom, we can become aware of our own prejudices by talking over the reality of these myths. Discovering that prejudice and discriminatory ways of thinking lurk inside us isn’t easy to take, but if we don’t become aware of them, we won’t be able to understand others.

When I was in graduate school, I participated in an antiracist demonstration in America. The only black man participant told the demonstrators, “We all discriminate against others because of race. Me, too. But we must start from there.” For myself, who had never thought about my own hidden prejudices, it was quite a shock. I learned, however, that by recognizing my own prejudicial ways of thinking, I was able to change and grow. From this change in my own consciousness I was able to cooperate with oppressed groups I do not belong to. Like feminist Chicana Gloria Anzaldua says, “We are not all oppressed in the same way, but we can sympathize with others who are oppressed.⁶” Even though there is not just one way we are all oppressed, we learn that we can act together with other groups on political issues.

What Can I Do for You?

I’m sure you’ve heard the scream of the “you” who “went to an international conference but wasn’t able to have any meaningful exchange” or “If only I had been able to explain the situation of women in Japan to the foreigner I met before.” What can I do for “you”?

I happened to have a chance to go to America as an exchange student. I studied English as a tool to live in the United States and majored in Women's Studies, and now I've found a job teaching English. Women's Studies taught me to see things I wasn't able to see before. I also learned that it is important to start from myself. A feminism supportive of many women embraces new ideas and talks of our diversity in plural form. "Feminism" becomes "Feminisms." We have difficulty working together because we are not just "women." There are many differences among women, for example First World vs. Third World, career women vs. full-time housewives, women who can/can't speak English, and so on, and these create a hierarchy and divide us. Nonetheless, on the one hand as we recognize our differences, we can create non-hierarchical, non-divisive relationships, and then work toward the possibility of global solidarity with people of all oppressed groups.

To become the protector of the "I" of the oppressed group I'm a member of and the ally of the "you" of the oppressed groups I'm not a member of, I want to teach and learn English as a resource for building solidarity and resistance.

¹ bell hooks, *Teaching to Transgress* (New York: Routledge, 1994), p. 168.

² Adrienne Rich and Barbara Charlesworth Gelpi, editors, *Adrienne Rich's Poetry and Prose Reviews and Criticism* (New York: Norton & Co., 1993), pp. 41–43.

³ "Women of color" note on translation into Japanese.

⁴ Mimi Orner, "Interrupting the Calls for Student Voice in 'Liberatory' Education: A Poststructuralist Perspective," in Carmen Luke and Jennifer Gore, editors, *Feminism and Critical Pedagogy* (New York: Routledge, 1992), p. 81.

⁵ Hotta, Midori, "Onna to Chikara," *Kurashi to Kyoiku wo Tsunagu We 6 gatsugo*, (Femix, 2002), pp. 7–8.

⁶ Gloria Anzaldua, "La Prietita," in Cherri Moraga and Gloria Anzaldua, editors, *This Bridge Called My Back: Writings by Radical Women of Color* (New York: Kitchen Table: Women of Color Press, 1981), p. 201.